

『表現学』 第五号（平成三年三月五日） 抜刷
大正大学表現学部表現文化学科

『敦煌秘笈』 所収の『浄土五會念佛誦經觀行儀卷下』 について

— 羽六三四・羽七〇四Vの翻刻と研究 —

大屋正順

『敦煌秘笈』所収の『浄土五會念佛誦經觀行儀卷下』について

—羽六三四・羽七〇四Vの翻刻と研究—

大屋 正順

はじめに

本稿では、杏雨書屋所蔵の敦煌文献から『浄土五會念佛誦經觀行儀卷下』二本（『敦煌秘笈』所収、羽六三四・羽七〇四V）を翻刻し考察を加える。

一 羽六三四について

一一一 翻刻（資料1）

図版は、『敦煌秘笈』影印冊八、三四八～三五〇頁（公益財団法人武田科学振興財団杏雨書屋編、二〇二二）。これには、五字一句の浄土法身讃・浄土五字讃・厭苦帰浄土讃が一行に三句ずつ書かれ、末尾に後跋が付されている。書体は楷書で、謹嚴さや字形の整齊感に欠けるが、点画は明瞭で一字一句時間をかけて書かれており、句間の余白に統一感をもたせる配慮もある。

一一二 P二九六三（正蔵八五巻、№二八二七の甲本）²と羽六三四との対校（資料2）

料2）

「浄土法身讃」は、羽六三四には五六句目の「念佛即无生」まで書かれており、P二九六三と文字の異同は多いものの内容に大差はない³。

「浄土五字讃」は、羽六三四に意図的な脱落と考えられる句が一つある。L027（資料1の行数、以下同様）の「妙開紫黄金」であり、特に修正した痕跡はなくその意図は不明である。また、羽六三四には、P二九六三に見られない偈が四つあった。

- ・ L023-024 極楽西方現 功多上寶臺 為縁修勝業 極目望清林
- ・ L037-038 裏有紫金臺 臺中有菩薩 惣是往生来 寶刹遊真性
- ・ L048-049 我今生彼國 自在十方遊 簾貫尋常動 法鼓自然鳴

・ L080-089 去塵須覓真 弘揚浄土教 即是往生人 欲得求三昧

その他、文字の異同は数ヶ所あるものの内容に大差はない。

「厭苦帰浄土讃」は、字句がほぼ一致している。

羽六三四には後跋があり、P二九六三と異なっている。守屋本にも跋文があるが、これは羽六三四とほぼ一致する。羽六三四L085に「誦回」とあるが、守屋本では「誦廻回」とある。「廻回」の語は、P二九六三と守屋本が一致する。羽六三四L087の欠けている二文字は、守屋本では「欲利」であり、羽六三四でも同様であると考えられる。また、奥題の「五會」も共通している。跋文はこれで三本に存在することとなったが、紀年をもつものは依然としてP二九六三のみである。その職語についてだが、正蔵の「日」は「月」、「莫」は「莫」、「願」は「彫」、「宮」は「宕」に訂正してよいだろう⁴。

二 羽七〇四Vについて

二一一 翻刻（資料3）

図版は、『敦煌秘笈』影印冊九、一一三頁（公益財団法人武田科学振興財団杏雨書屋編、二〇二二）。羽七〇四Rと羽七〇四Vは別紙に書かれたもので、羽七〇四Rの裏に羽七〇四Vを貼り付けている。L001～L082が続けて書かれたものをオリジナルとする【A】と【A】のL001～L005を切り取り、またL001～L002【a】とL003～L005【c】の二枚に分ける。そして、羽七〇四Rを裏返してL006～L042【a】を上辺に合わせて貼り、下の余った部分に【B】と【c】を貼ったと思われる。羽七〇四VのL022～L082にかけて、貼付した際にできる可能性があるため、Rの後の方にVを貼ったといえる。また、L034～L038の最終文字が、貼られた紙で隠れている部分

を確認できるため、「D」を先に貼ってから「B」「C」を貼付したことが分かる。

「依阿弥陀経讃」は全文、その前の「依無量寿観經讃」は後部、その後の「歎散花供養讚」は前部のみ確認できる。Rの後ろにVを貼ったのなら、Rを補強するためにVを貼ったのだろうか、意図は不明だがRを重視していたことは確かであろう。しかし、Vも適当にはなく、偶が確認できるように行に合わせて切り取っていることから、こちらも尊重はしていると考ええる。「依阿弥陀経讃」が全文確認できることに意味を見出すのなら、この讚を残そうとする意図がはたらいっていたともいえる。

Rを確認すると、題名は「絶粒法」となっており、『敦煌秘笈』の記事には『開元天寶遺事』とある。これは、盛唐の榮華を物語る遺聞を集めた書で、王仁裕(八八〇—九五六)が莊宗のとき秦州節度判官となり、長安に至って民間に伝わる話を一五九話搜集したもので、その中の「喚鐵」という題の語に「太白山、有隱士郭休、字退夫、有運氣絶粒之術……」とあり、「絶粒之術」とは一種の氣功のようなものであると考えられる。

羽七〇四Rには、この話の文章がそのまま出ているわけではなく、「絶粒法雄黄一分砂二分朱紅口金五箔銀五箔……」と始まっており、その冒頭の文字から題名をつけている。『敦煌秘笈』の記事はこの「絶粒」についての手がかりを与えてくれたのだが、書かれている文章そのものの典拠を見つけることはできなかった。

また、時代は下るが蘇軾(一〇三七—一一〇一)にも「吳子野絶粒不睡、過作詩戲之、芝上人・陸道士皆和、予亦次其韻」¹⁾という題の七言律詩があり、吳子野が「粒を断つて眠らない」状態であった様子を見て、過(吳子野の子)が詩を作って芝上人(魯秀)と陸道士(惟忠)がこれに和したという詩で、「絶粒」は不食不眠状態を指すことが分かる。その「絶粒」状態が、「聊か不死の五通仙となり」(一句目)と、神仙思想の一つの理想的な境地とされたといえる。羽七〇四Rの内容が神仙思想とどのように関わるかを示し得ないが、絶粒状態を保つための、あるいは、それによってもたらされる事柄に関する具体的な記述が多いと思われる。

次に、書きぶりを確認すると、RよりもVの方が謹厳さを保っていることがわかる。Rに界罫はなく一行の文字数、文字の大小等安定しないものの、草卒な印象はなく右払いやトメ・ハネなど十分に時間をかけて書いている文字もある。書体は基本的に楷書だが行意を帯びているものも多く見られる。一方、Vは切り取られて貼り付けに使われているものの、界罫も引かれていないし、慎重な書きぶりから保存を目的として

書かれたともいえる。一見して、L015「去」・L016「生」・L021「中」の縦面の充実感が際立っている。しかし、七字二句を一行に規則的に書いているものの、二句の間が空きすぎていて行の下にくる句が基本的に詰まっているし、句ごとの上下が揃っていない。また、字形が安定せず伸びやかさに欠ける文字も多くあるため、完成度が高いというわけではないのだが、法照関係典籍の写本ではめずらしく謹厳さを保っている一本といえるのではないだろうか²⁾。

二二 P三三〇(正蔵八五巻、No.二八二七の原本)³⁾と羽七〇四Vの対校(資料4)

羽七〇四Vには、「依阿弥陀経讃」冒頭(L012~L014)の句のあとに「阿弥陀仏」「南無阿弥陀仏」と書かれている。その他、文字の異同は数ヶ所あるものの内容に大差はない。

小結

以上、杏雨書屋所蔵『敦煌秘笈』所収の『淨土五會念佛誦經行儀卷下』二本「羽六三四」と「羽七〇四V」を翻刻し若干の考察を加えた。

羽六三四には、P二九六三には見られない四偈が存在することがわかった。また、守屋本とほぼ同様の跋文をもつことを確認した。

羽七〇四Vは、法照関係典籍の写本ではめずらしく謹厳さを保っている楷書で書かれていることがわかった。また、Rは「絶粒法」という神仙思想に関わる文章であり、RとVの関係性としては、Rが重視されVが裏に貼り付けられたものであることを確認した。

¹⁾ 法照撰『淨土五會念佛誦經行儀』(広本) に関しては、塚本善隆『唐中期の淨土教―特に法照禪師の研究』(法蔵館、一九七五)、『塚本善隆著作集』第四卷・中国淨土教史研究、大蔵出版社、一九七六)・齊藤隆信『中国淨土教儀礼の研究―善導と法照の讚偈の律動を中心として』(法蔵館、二〇一五)において詳細な研究がなされている。諸本の整理については、『齊藤二〇一五』二〇五頁で述べられているように、廣川堯敏と張先堂の整理で概ね完了している。両氏の功績は、廣川堯敏『敦煌出土

法照関係資料について(石田充之博士古稀記念論文集『浄土教の研究』永田文島堂 一九八二)、張先堂『晚唐至宋初浄土五会念佛門在敦煌的流傳』、『敦煌研究』一九九八第一期。また、本発表で取り上げる二本についても「齊藤二〇一五」三六〇頁です。言及されており、さらに「敦煌秘笈」所収の羽二五五・羽四二二についても、「それぞれ『広本』と同じ讃偈が収められているが、『広本』とは讃題や順序が異なり、また『広本』に見られない讃偈まで含まれていることから、ここでは別行本とみなしておきたい。」としている。この二本は「廣川一九八二」と「張一九九八」の段階で目録上の存在に留まっていた「李氏鑑藏本(散録三四)」・「李氏鑑藏本(散録五四〇)」に一致する。

² P二九六三は、龍谷大学古典籍デジタルアーカイブ研究センター「フランス国立図書館所蔵の敦煌文書ペリオレクションの科学分析」のアーカイブデータを参照した(https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bv1b83022946_201809022946_201809022946)。なお、写真と正蔵との対校の結果、正蔵八五・二六五頁・中段・三行目の「心」は「曲」であった。また、識語は四文字訂正してよいと思われる(後出)。

³ 『齊藤二〇一五』四二二〜四二三頁で、浄土法身讃の後半部分(碎末為金藏、子父不相伝)の二〇句は、P二九六三にはあるが、守屋本・羽六二四・S六七三四にはないことがすでに指摘されている。「浄土法身讃」は法照自作とされ、「広本」の第二八番目に出る讃だが、「大乘浄土讃」という別名でも流布していたと考えられている。上山大峻は「敦煌出土『浄土法身讃』について」(『真宗研究』第二二輯、一九七六)で六本の敦煌写本の校訂作業を行った。「廣川一九八二」では附表一で、一四本の写本の存在を指摘している。この中のS三七〇だが、五字句の讃はみられたものの内容的には一致しなかった。また、〇三三六二だが、これは、孟列夫主編『俄藏敦煌漢文寫卷叙録』上冊(上海古籍出版社、一九九九)、五三五頁に、「Dx-883a (一)「浄土法身讃」とあるように目録上は存在するのだが、『俄藏敦煌漢文寫卷叙録』(上海古籍出版社、一九九六)にDx-883を冠する本として掲載されているのは、Dx00883A 發願文・Dx00883AV 雜写・Dx00883B 施物疏・Dx00883C 付披子疏・Dx00883CV 藏文殘字であり、「浄土法身讃」は確認できなかった。おそらく刊本に掲載されなかったということだと思われる。さらに「張一九九八」の一覧表には、「孟1361(Dx-883(1))」の項に目録とも刊本ともちがう題名が書かれている。よって、〇三三六一(Dx-883)については、少々混乱しており、確認できていない。「齊藤二〇一五」では、韻律

の観点からこの「浄土法身讃」について、「現在のところこれを法照自作とするか否かは保留としておきたい。」(四二〇〜四二三頁)としている。また、資料編④で、律動を重視した校訂テキスト「浄土法身讃」を作成している(五五〇〜五五三頁)。

⁴ 『齊藤二〇一五』三六〇頁に後跋の翻刻掲載あり。

⁵ 「守屋本」は、守屋孝蔵氏旧蔵で現在京都国立博物館所蔵の『浄土五会念佛誦經觀行儀卷下』一巻で、「守屋孝蔵氏蒐集土呂経目録」(京都国立博物館、一九六四)の図二四四(九九頁)と『京都国立博物館蔵品目録』(京都国立博物館、一九九六)の図七〇(三三頁)で確認した。守屋本については「齊藤二〇一五」四三二八頁。「塚本一九七六」三八四頁でも同様に説かれている。「日」にも「月」にも見えるが、「蕤賓(スイヒン・陰曆五月の異称)月」とするのが自然であろう。「莫」の草冠の下にはウ冠が確認できる。「願」の「原」は「周」であり、「頁」ではなく「弓」として問題ない。「宮」字は修正しており、一点打つてから改めて太めの線で「石」になっている。(https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bv1b83022946/f12_item_zoom 二〇一八年九月参照)

⁷ 『敦煌秘笈』影印冊九(公益財団法人武田科学振興財団杏雨書屋編、二〇二三)、一一〇頁。

⁸ 『漢籍解題』復刻版(明治書院、二〇〇五)、『和刻本漢籍隨筆集』第六集(汲古書院、一九七三)。

⁹ 明吳永輯『續百川學海』丙集第三冊、清陳世倌輯『唐人說薈』第三冊(緯文堂刊、同治三)「太白山有隱士郭休、字退、有運氣絕粒之術。於山中建茅屋百餘間、有白雲亭、鍊丹洞、注易亭、修真亭、朝元壇、集神閣。每於白雲亭與賓客看山禽野獸、即以槌擊一鐵片子、其聲清響、山中鳥獸聞之集於亭下、呼為「喚鐵」。」

¹⁰ 『蘇東坡全詩集』第一卷「続国訳漢文大成」(日本図書センター、一九七八)、七四六〜七四八頁。「吳子野絶粒不睡過作詩戲之笑之上人陸道士皆和予亦次其韻、聊為不死五通仙、終了無生一大縁、獨鶴有聲知半夜、老蠶不食三眠、憐君解比人間夢、許我時迷醉後禪、會與江山成故事、不妨詩酒樂新年。」また、蘇軾には「説開元天寶遺事」と題する詩が三首ある(前掲詩集二〇六〜二〇九頁)。ことから、「開元天寶遺事」は蘇軾の時代にも知られていたし、蘇軾にとっては興味深い一書であったことがうかがえる。しかし、「開元天寶遺事」「喚鐵」に出る「絶粒」の語への言及はない。

¹¹ 例え、「……其疾必退、一日、來着身、一日、口如少行、三日、小腹知、四日、

□嗚 五日・・・」(1018—1020)、「・・・或三千息仙矣 第一日九口、二日七口、三日六口、四日五口、五日四口、六日三口、七日二口、八日不吐不納」(1034—1036)^{1/2}
「廣川」一九八二〇—一九八七〇頁で、法照撰述書の敦煌写本の五本について書きぶりについても言及しているが、P二〇六六のみ「やや謹嚴な楷書」とし、P二二五〇・P一九六三・P三三七二については「乱雑な楷書」としている。筆写は、羽六三四にも含まれていた「淨土法身讚(大乘淨土讚)」の写本を図版で十七本確認したが、「謹嚴な楷書」といえるようなものはなかった。^{1/3}
^{1/3} P二二五〇は、『法藏敦煌西域文獻』⑩(上海古籍出版社、一九九九)、七五〇—八二頁を参照した。P二二五〇と正藏との対校の結果、正藏八五・二二五六頁・下段・六行目の「觀」は「欲」で、正藏八五・二二五六頁・下段・二五行目の「孤」は「狐」であった。

001	淨土法身讚 <small>此法身一釋法照</small>	法鏡臨空照	052	真心入三昧	永離苦娑婆	汝今一念善	
002	心通五色堅	遊神妙刹土	法界惣同然	053	名字十方知	勤念弥陀佛	正是發心時
003	意珠恒自淨	神光遍十方	知心無處所	054	欲得求三昧	無過自攝心	身心莫間斷
004	解脫得清涼	觀像而无像	高聲不染聲	055	慈主自来尋	極樂真圓淨	餘方未得過
005	了知无所有	惠鏡朗然明	寂々幽靈淨	056	心々求三昧	入定見弥陀	池水金沙映
006	恬然无所緣	坐臥空霄裏	超出離人天	057	蓮花遍滿生	念佛人皆往	隨意任經行
007	覽引池邊立	洗却意中滯	清淨无塵垢	058	欲求三昧樂	去魔須覓真	弘揚淨土教
008	願汝證菩提	惠鏡無令關	智珠常用明	059	即是往生人	欲得求三昧	無過多碎身
009	塵勞須断却	寶坐自然迎	注想常觀察	060	真行世尊教	令衆見今身	諸佛成无漏
010	三昧寶王真	洞閑三藏教	拂却意中塵	061	皆由累劫修	欲生淨土者	心裏自勤求
011	人今專念佛	念者入深禪	初夜端心座	062	積寶如山岳	衆生不解求	內懷明月鏡
012	西方在目前	念即知无念	無念是真如	063	不識一生休	寶閣金樓網	花雨滿池亭
013	此了此中意	名為法性珠	淨土在心頭	064	清音七寶管	不弄自然鳴	佛力加持我
014	愚人向氷求	心中有寶鏡	不識一生休	065	今朝出愛河	剎那生彼國	還此求娑婆
015	諸佛在心頭	汝自不能求	慎勿令虚過	066	淨土金沙水	尋常邊佛流	有人入定見
016	急手早勤修	寶鏡人家有	愚人不解磨	067	歡喜更何憂	聽說人生者	池中是我家
017	不曾反自照	塵垢更增多	寶鏡人家有	068	乘蓮心自在	遊戲散天花	我今住三昧
018	智人即解磨	勤々反自照	塵垢不來過	069	蓮花色焰暉	心遊七寶殿	礼佛未能歸
019	意珠恒自徹	自性本圓明	悟理知真趣	070	有人欲擬退	蓮花葉便委	精心勤念佛
020	念佛即无生	淨土五字讚 <small>此法身一釋</small>		071	花色更增暉	苦海廣无边	弥陀願力船
021	淨刹西方好	人人道可憐	課功勤念佛	072	迎將生淨土	盡得坐紅蓮	淨土諸菩薩
022	永得利人天	淨土有金園	心通五色堅	073	因是苦勤修	花中得上品	一念十方遊
023	弥陀皆攝取	普願坐紅蓮	極樂西方現	074	厭苦歸淨土讚 <small>此法身一釋</small>		
024	功多上寶臺	為緣修勝業	極目望清林	075	寶閣無人上	地獄競來奔	一朝命已盡
025	蓮池碧色深	金花處々滿	玉戸洞清音	076	何故入衆門	西方人牢到	地獄競來奔
026	五濁慙勤別	西方共作期	莫迷死生苦	077	念佛如明鏡	造罪闇昏々	地獄不須去
027	淨土致狐疑	菩薩上遊吟	淨域金時到	078	淨土早歸來	池中實妙樂	永劫不開哀
028	蓮池花色異	為承紅願力	一念坐蓮臺	079	地獄酸寒苦	牛頭在眼前	罪人欲入去
029	蓮花久已開	其間寶網鞞	時々出寶果	080	苦痛哭號天	生存不念佛	死後入泉門
030	淨土檀金樹	寶殿金樓閣	弘蓮生碧池	081	鑊湯頻受苦	猛焰脇人魂	釋迦臺上坐
031	衆等至心觀	妙偈万般詞	七寶為宮殿	082	徒衆競來聽	說此閻浮苦	輪迴不暫亭
032	但知勤念佛	真心念佛者	聽取聲中意	083	西方實妙樂	百寶紫金臺	黃金為界道
033	金蓮合作臺	寶鳥作音聲	鴛鴦遊戲吟	084	見者發心來	寶閣西方現	金臺更可憐
034	弥陀極樂處	孔崔佛前坐	鴛鴦遊戲吟	085	池中花生子	水裏撥紅蓮	碧玉池中水
035	喚汝入金城	鸚鵡自彈琴	池水於前現	086	蓮花辭々香	花開能見佛	聞法悟真常
036	白鶴空中舞	臺中有菩薩	惣是往生來	087	化闍多青翠	金樓寶網鞞	摩尼幢上蓋
037	裏有紫金臺	花林契法身	汝但持妙典	088	池水百花般	一生勤念佛	於願出娑婆
038	寶刹遊真性	覽向臺邊坐	弥陀見我身	089	身心無間斷	長却坐蓮荷	歸命弥陀佛
039	諸佛證成真	好在往生人	蓮花一叢赤	090	稽首彼如來	誓生極樂國	池裏坐花臺
040	問言諸子等	中間花生子	言語甚分明	091	下意歸西路	低心攝有情	弥陀慈愍見
041	復有一叢青	唯須念佛強	下心修淨業	092	報盡自然迎		
042	欲得往西方	極樂无燈火	隨形各自明	093	上來依諸聖教	略述讚揚五會法事軌儀	以為三卷
043	巍巍入寶堂	速得悟无生	世尊上寶樓	094	佛誦讚了即還	依前卷誦向發願文	即散應知時大
044	但知勤念佛	願汝心清淨	努力早勤求	095	歷九年冬初十月	於北京龍興寺	再述淨土念誦觀
045	住在化城頭	無明不見他	碎身勤懺却	096	門意普口口天人	含生蒙潤皆令脫	落塵滓騰
046	極樂前頭現	西方有寶樓	聖衆盡來投	097	神淨方證妙覺之	圓明共處蓮花之會	願諸智
047	慈主自来過	自在十方遊	籀管尋常動	098	者深信修行厭離	輪迴生死世界專稱	佛同往
048	我今生彼國	音中常念佛	曲裏說无生	099	淨方疾證菩提豈	非善哉樂哉矣有緣之者	願
049	法鼓自然鳴	迷人不自勤	衆等須勤念	100	共歸西根性有差	各隨業云尔淨土五會念佛誦經	
050	諸佛乃隨身	妙刹心中現	都由淨業多	101			
051	心裏每常欣			102	觀行儀卷下		

P2963 (185, 1264c-1266a)

淨土法身讚 此讚通一切處誦 釋法照
 法鏡臨空照 神通獨色堅 神通妙刹丘 法界惣同然
 意殊恒自淨 神光遍十方 知心無處所 解脫得清涼
 觀像而無像 高聲不染聲 了知無所有 惠鏡朗然明
 寂寂幽靈酬 恬然無所緣 坐臥空罽裏 超出離人天
 暨引池邊立 洗却意中泥 清淨無塵垢 願汝證菩提
 惠鏡無令闇 智珠常用明 塵勞須斷却 寶坐自然迎
 注想常觀察 三昧寶王珍 洞閑三藏教 拂却意中泥
 人今專念佛 念者入深禪 初夜端心坐 西方在目前
 念即知無念 無念是真如 若了此中意 名為法性珠
 淨土在心頭 愚人向外求 心中有寶鏡 不識一生休
 諸佛在心頭 汝自不能求 慎勿令虛過 急手早勤求
 寶鏡人家有 愚人不解磨 不曾反自照 塵垢更增多
 寶鏡人家有 智人即解磨 勤勤返自照 塵垢不來過
 意珠恒劉徹 自性本圓明 悟理知真趣 念佛即無生
 碎末為金礦 礦中不見金 智者用消鍊 真金腹內現
 佛相空無相 真如寂不言 口談文字教 此界忘相禪
 涅槃末鐵法 祕密不教傳 心通常自用 威當度有緣
 三乘元不識 外道未曾聞 小相未曾聞 誓願不流傳
 道逢良賢 把手相傳 道逢不良賢 子父不相傳

淨土五字讚 通一切處誦

淨利西方好 人人道可憐 課功勤念佛 永得離人天
 淨土有金園 心通獨色堅 彌陀皆攝取 普願坐紅蓮

蓮池碧色探 金花處處滿 玉戶洞清音 五濁慙勤別
 西方共作期 莫迷生死苦 淨土致狐疑 妙閣紫黃金
 琉璃七寶林 蓮池花色異 菩薩上遊吟 淨域今時到
 蓮花久已開 為承紅願力 一念坐蓮臺 淨利檀金樹
 其間寶網靚 時時出寶果 衆等到心觀 寶殿金樓閣
 紅蓮生碧池 但知勤念佛 妙偈萬般詞 七寶為宮殿
 金蓮合作臺 真心念佛者 惣得上花來 彌陀極樂處
 寶鳥作音聲 聽取聲中意 喚汝入金城 孔樹佛前坐
 鴛鴦遊戲吟 白鶴空中舞 鸚鵡自彈琴 池水於前現

花林契法身 汝但持妙典 諸佛證成真 暨向臺邊坐
 彌陀見我身 問言諸子等 好在往生人 蓮花一叢赤
 復有一叢青 中間化生子 言語甚分明 欲得往西方
 唯須念佛強 下心修淨業 巍巍入寶堂 極樂無燈火
 隨形各自明 但知勤念佛 速得悟無生 世尊上寶樓
 住在化城頭 願汝心清淨 努力早勤求 極樂前頭現
 無明不見他 碎身勤懺却 慈主自來過 西方有寶樓
 聖衆自來頭 音中常念佛 曲裏說無生 諸佛乃隨身

迷人不自動 衆等須勤念 心裏每常欣 妙刹心中現
 都由淨業多 真心入三昧 永離苦娑婆 妙刹一念善

羽634

淨土法身讚 此讚通一切處誦 釋法照

法鏡臨空照 神通五色堅 遊神妙刹出 法界惣同然
 意殊恒自淨 神光遍十方 知心無處所 解脫得清涼
 觀像而無像 高聲不染聲 了知無所有 惠鏡朗然明
 寂々幽靈酬 恬然無所緣 坐臥空罽裏 超出離人天
 暨引池邊立 洗却意中泥 清淨無塵垢 願汝證菩提
 惠鏡無令闇 智珠常用明 塵勞須斷却 寶坐自然迎
 注想常觀察 三昧寶王真 洞閑三藏教 拂却意中塵
 人今專念佛 念者入深禪 初夜端心坐 西方在目前
 念即知無念 無念是真如 此了此中意 名為法性珠
 淨土在心頭 愚人向外求 心中有寶鏡 不識一生休
 諸佛在心頭 汝自不能求 慎勿令虛過 急手早勤求
 寶鏡人家有 愚人不解磨 不曾反自照 塵垢更增多
 寶鏡人家有 智人即解磨 勤々反自照 塵垢不來過
 意珠恒自徹 自性本圓明 悟理知真趣 念佛即无生

淨土五字讚 通一切處誦

淨利西方好 人人道可憐 課功勤念佛 永得利人天
 淨土有金園 心通五色堅 彌陀皆攝取 普願坐紅蓮

蓮池碧色深 金花處處滿 玉戶洞清音 五濁慙勤別
 西方共作期 莫迷生死苦 淨土致狐疑 妙閣紫黃金
 琉璃七寶林 蓮池花色異 菩薩上遊吟 淨域金時到
 蓮花久已開 為承紅願力 一念坐蓮臺 淨利檀金樹
 其間寶網靚 時々出寶果 衆等到心觀 寶殿金樓閣
 紅蓮生碧池 但知勤念佛 妙偈萬般詞 七寶為宮殿
 金蓮合作臺 真心念佛者 惣得上花來 彌陀極樂處
 寶鳥作音聲 聽取聲中意 喚汝入金城 孔樹佛前坐
 鴛鴦遊戲吟 白鶴空中舞 鸚鵡自彈琴 池水於前現

裏有紫金臺 臺中有菩薩 惣是往生來 寶刹遊真性
 花林契法身 汝但持妙典 諸佛證成真 暨向臺邊坐
 彌陀見我身 問言諸子等 好在往生人 蓮花一叢赤
 復有一叢青 中間化生子 言語甚分明 欲得往西方
 唯須念佛強 下心修淨業 巍巍入寶堂 極樂無燈火
 隨形各自明 但知勤念佛 速得悟無生 世尊上寶樓
 住在化城頭 願汝心清淨 努力早勤求 極樂前頭現
 無明不見他 碎身勤懺却 慈主自來過 西方有寶樓
 聖衆自來頭 我今生彼國 自在十方遊 籙管尋常動

迷人不自動 衆等須勤念 心裏每常欣 妙刹心中現
 都由淨業多 真心入三昧 永離苦娑婆 汝今一念善

名字十方知	勤念弥陀佛	正是發心時	欲得求三昧
無過自攝心	身心莫間斷	慈主自来尋	極樂真圓淨
餘方未得過	心心求三昧	入定見弥陀	池水金沙映
蓮花遍滿生	念佛人皆往	隨意任經行	欲求三昧樂
無過多碎身	真行世尊教	令眾見金身	諸佛成無漏
皆由累劫修	欲生淨土者	心裏自勤求	積寶如山岳
眾生不能求	內懷明月鏡	不識一生休	寶閣金樓網
花雨滿池亭	清音七寶管	不弄自然鳴	佛力加持我
今朝出愛河	利那生彼國	還此救娑婆	淨土金沙水
尋常遠佛流	有人入定見	歡喜更何憂	聽說人生者
池中是我家	乘蓮心自在	遊戲散天花	我今住三昧
蓮花色焰暉	心遊七寶殿	禮佛未能歸	有人欲擬退
蓮花葉便委	精心勤念佛	花色更增暉	苦海廣無邊
弥陀願力船	迎將生淨土	盡得坐紅蓮	淨土諸菩薩
因是苦勤修	花中得上品	一念十方遊	

厭苦歸淨土讚 此讚大會時誦

寶閣無人上	地獄競來奔	一朝命已盡	何故入剎門
西方人牢到	地獄競來奔	念佛如明鏡	造罪闇昏々
地獄不須去	淨土早歸來	池中實妙樂	永劫不聞哀
地獄酸寒苦	牛頭在眼前	罪人欲入去	苦痛哭號天
生存不念佛	死後入泉門	鑊湯頻受苦	猛焰脇人魂
釋迦臺上坐	徒眾競來聽	說此閻浮苦	輪迴不暫亭
西方實妙樂	百寶紫蓮臺	黃金為界道	見者發心來
寶閣西方現	金臺更可憐	池中化生子	水裏撥紅蓮
碧玉池中水	蓮花瓣瓣香	花開能見佛	聞法悟真常
化關多青翠	金樓寶網靚	摩尼幢上蓋	池水百花般
一生勤念佛	獨願出娑婆	身心無間斷	長却坐蓮荷
歸念弥陀佛	稽首彼如來	誓生極樂國	池裏坐花臺
下意歸西路	低心攝有情	弥陀慈愍見	報盡自然迎

上來依諸聖教略述讚揚五會法事軌儀以為三卷

前之兩卷具有明文意遣群疑歸心淨國

眾等若念誦讚行即依前卷迴向發願文即便應知

時大歷九年冬初十月於北京龍興寺再述淨土念誦觀門

滓騰神淨方證妙覺之圓明共處蓮花之會

願諸智者深信修行厭離輪迴生死世界專稱彼佛同往淨方疾證菩提

豈非善哉樂哉矣

有緣之者願共歸西根性有差各隨業云尔

淨土念佛誦經觀行儀卷下

時乾祐四年歲次辛亥蕤賓之月癸卯十三葉於石泉大

聖先嚴寺講堂後弥勒院寫故記

名字十方知	勤念弥陀佛	正是發心時	欲得求三昧
無過自攝心	身心莫間斷	慈主自来尋	極樂真圓淨
餘方未得過	心々求三昧	入定見弥陀	池水金沙映
蓮花遍滿生	念佛人皆往	隨意任經行	欲求三昧樂
去魔須覓真	弘揚淨土教	即是往生人	欲得求三昧
無過多碎身	真行世尊教	令眾見金身	諸佛成無漏
皆由累劫修	欲生淨土者	心裏自勤求	積寶如山岳
眾生不解求	內懷明月鏡	不識一生休	寶閣金樓網
花雨滿池亭	清音七寶管	不弄自然鳴	佛力加持我
今朝出愛河	利那生彼國	還此救娑婆	淨土金沙水
尋常遠佛流	有人入定見	歡喜更何憂	聽說人生者
池中是我家	乘蓮心自在	遊戲散天花	我今住三昧
蓮花色焰暉	心遊七寶殿	禮佛未能歸	有人欲擬退
蓮花葉便委	精心勤念佛	花色更增暉	苦海廣無邊
弥陀願力船	迎將生淨土	盡得坐紅蓮	淨土諸菩薩
因是苦勤修	花中得上品	一念十方遊	

厭苦歸淨土讚 此讚大會時誦

寶閣無人上	地獄競來奔	一朝命已盡	何故入剎門
西方人牢到	地獄競來奔	念佛如明鏡	造罪闇昏々
地獄不須去	淨土早歸來	池中實妙樂	永劫不聞哀
地獄酸寒苦	牛頭在眼前	罪人欲入去	苦痛哭號天
生存不念佛	死後入泉門	鑊湯頻受苦	猛焰脇人魂
釋迦臺上坐	徒眾競來聽	說此閻浮苦	輪迴不暫亭
西方實妙樂	百寶紫蓮臺	黃金為界道	見者發心來
寶閣西方現	金臺更可憐	池中化生子	水裏撥紅蓮
碧玉池中水	蓮花瓣瓣香	花開能見佛	聞法悟真常
化關多青翠	金樓寶網靚	摩尼幢上蓋	池水百花般
一生勤念佛	獨願出娑婆	身心無間斷	長却坐蓮荷
歸念弥陀佛	稽首彼如來	誓生極樂國	池裏坐花臺
下意歸西路	低心攝有情	弥陀慈愍見	報盡自然迎

上來依諸聖教略述讚揚五會法事軌儀以為三卷

前之兩卷具有明文意遣群疑歸心淨國

眾等若念佛誦讚了即還依前卷誦向發願文即應應知

時大歷九年冬初十月於北京龍興寺再述淨土念誦觀門

意普□□天人含生藜潤皆令脫落塵滓騰神淨方證妙覺

之圓明共處蓮花之會

願諸智者深信修行厭離輪迴生死世界專稱彼佛同往淨方疾證菩提

豈非善哉樂哉矣

有緣之者願共歸西根性有差各隨業云尔

淨土五會念佛誦經觀行儀卷下

006 到彼花開發記 登時開法信無生
 007 十惡五逆至惡人 永劫沈淪在六塵
 008 一念稱得弥陀号 至彼還同法性身
 009 世尊說已向香山 阿羅開教廣宣傳
 010 大眾欣心皆頂戴 還將此法利人天
 011 依阿彌陀經講主疏 釋法照
 012 釋迦聖智廣無邊 先開淨教利人天
 013 菩薩摩訶薩無量 其時聽在捨利國
 014 初生身聞舍利子 吾今欲說汝應聽
 015 去此西方十萬億 亦隨寶國樂金形
 016 其國衆生種妙樂 永劫不開墮苦名
 017 勸汝當勤修彼佛 須臾即至寶蓮城
 018 瓊林寶樹七重欄 衆等當須審諦觀
 019 珠網層層千萬億 能令見者得心安
 020 亦隨淨刹不思議 處處流七寶池
 021 池中寶是摩尼水 晝夜花開無盡時
 022 四岸琉璃碧玉成 香風拂拂覺身輕
 023 口口稱讚千萬億 無量菩薩隨經行
 024 心淨智法王家 專稱亦隨發蓮華
 025 碧玉樓中開法妙 黃金地上散天花
 026 衣絨持花十方億 聖衆塵沙受供同
 027 一令遍瞻禮國 永絕胎障六通
 028 淨國亦隨覺音 聞者皆生大佛心
 029 此鳥聲非二惡趣 爲令宣演法幽深
 030 香風時動寶林鳴 處處離間念佛聲
 031 聲中皆說無邊法 能令聽者證無生
 032 亦隨淨刹皆能知 國中衆人衆亦如斯
 033 到彼皆同法教位 永絕生死證無爲
 034 善根福少理難容 七日須成淨土功
 035 念念傾心於彼國 剎剎便即坐蓮宮
 036 亦隨願力不思議 莊嚴淨國聖希奇
 037 六方諸佛同時讚 意令諸士斷狐疑
 038 人命無常如剎那 永劫沈淪無幾多
 039 急急須專念彼佛 共汝相將出愛河
 040 諸佛同心嘆稱迦 能於苦海度人多
 041 一應令專念佛 生々當得見弥陀
 042 如來說已向離宣 普化群生被有緣
 043 衆等傾心須頂戴 弘斯淨教廣流傳
 044 敬散花供養讚 釋神英
 045 昔有仙人名善慧 一時買得五菴菴
 046 持將供養定光佛 因花果身釋迦尊
 047 諸經皆說妙仰他 散花供養福田多
 048 但以一花散一佛 因花獲得見弥陀
 049 今時智有經文 佛說花爲成佛因
 050 便即散花供養佛 仍將花度有緣人
 051 紛紛正見散花時 片片皆連空裏飛
 052 一一爭前將手捧 人人收得極盛歸

001 如來神變不思議 大小隨緣感尊機
 002 衆等傾心勤念佛 寶池花內證無爲

高起 聖聖 聖聖 聖聖
 上品之人 種種 種種 種種
 003 行業精誠 誠氣 誠氣 誠氣
 004 百法門中 妙定 妙定 妙定
 005 念佛之人 氣至 氣至 氣至

<p>P2250 (195-1256b-1257a) 如來神變不思議 大小隨緣感尊機 衆等傾心勤念佛 寶池花內證無爲 行業精誠須高 上品之人種種 百法門中妙定 金剛妙定自歸 念佛之人須至誠 亦隨決定自親迎 到彼花開發記 登時開法信無生 十惡五逆至惡人 永劫沈淪在六塵 一念稱得弥陀号 至彼還同法性身 世尊說已向香山 阿羅開教廣宣傳 大眾欣心皆頂戴 還將此法利人天 依阿彌陀經講主疏 釋法照 釋迦聖智廣無邊 先開淨教利人天 菩薩摩訶薩無量 其時聽在捨利國 初生身聞舍利子 吾今欲說汝應聽 去此西方十萬億 亦隨寶國樂金形 其國衆生種妙樂 永劫不開墮苦名 勸汝當勤修彼佛 須臾即至寶蓮城 瓊林寶樹七重欄 衆等當須審諦觀 珠網層層千萬億 能令見者得心安 亦隨淨刹不思議 處處流七寶池 池中寶是摩尼水 晝夜花開無盡時 四岸琉璃碧玉成 香風拂拂覺身輕 寶樹層層千萬億 無量菩薩隨經行 心淨智法王家 專稱亦隨發蓮華 碧玉樓中開法妙 黃金地上散天花 衣絨持花十方億 聖衆塵沙受供同 一令遍瞻禮國 永絕胎障六通 淨國亦隨覺音 聞者皆生大佛心 此鳥聲非二惡趣 爲令宣演法幽深 香風時動寶林鳴 處處離間念佛聲 聲中皆說無邊法 能令聽者證無生 亦隨淨刹皆能知 國中衆人衆亦如斯 到彼皆同法教位 永絕生死證無爲 善根福少理難容 七日須成淨土功 念念傾心於彼國 剎剎便即坐蓮宮 亦隨願力不思議 莊嚴淨土聖希奇 六方諸佛同時讚 意令諸士斷狐疑 人命無常如剎那 永劫沈淪無幾多 急急須專念彼佛 共汝相將出愛河 諸佛同心嘆稱迦 能於苦海度人多 一應令專念佛 生々當得見弥陀 如來說已向離宣 普化群生被有緣 衆等傾心須頂戴 弘斯淨教廣流傳 敬散花供養讚 釋神英 昔有仙人名善慧 一時買得五菴菴 持將供養定光佛 因花果身釋迦尊 諸經皆說妙仰他 散花供養福田多 但以一花散一佛 因花獲得見弥陀 今時智有經文 佛說花爲成佛因 便即散花供養佛 仍將花度有緣人 紛紛正見散花時 片片皆連空裏飛 一一爭前將手捧 人人收得極盛歸</p>	<p>704V 如來神變不思議 大小隨緣感尊機 衆等傾心勤念佛 寶池花內證無爲 行業精誠須高 上品之人種種 百法門中妙定 金剛妙定自歸 念佛之人須至誠 亦隨決定自親迎 到彼花開發記 登時開法信無生 十惡五逆至惡人 永劫沈淪在六塵 一念稱得弥陀号 至彼還同法性身 世尊說已向香山 阿羅開教廣宣傳 大眾欣心皆頂戴 還將此法利人天 依阿彌陀經講主疏 釋法照 釋迦聖智廣無邊 先開淨教利人天 菩薩摩訶薩無量 其時聽在捨利國 初生身聞舍利子 吾今欲說汝應聽 去此西方十萬億 亦隨寶國樂金形 其國衆生種妙樂 永劫不開墮苦名 勸汝當勤修彼佛 須臾即至寶蓮城 瓊林寶樹七重欄 衆等當須審諦觀 珠網層層千萬億 能令見者得心安 亦隨淨刹不思議 處處流七寶池 池中寶是摩尼水 晝夜花開無盡時 四岸琉璃碧玉成 香風拂拂覺身輕 寶樹層層千萬億 無量菩薩隨經行 心淨智法王家 專稱亦隨發蓮華 碧玉樓中開法妙 黃金地上散天花 衣絨持花十方億 聖衆塵沙受供同 一令遍瞻禮國 永絕胎障六通 淨國亦隨覺音 聞者皆生大佛心 此鳥聲非二惡趣 爲令宣演法幽深 香風時動寶林鳴 處處離間念佛聲 聲中皆說無邊法 能令聽者證無生 亦隨淨刹皆能知 國中衆人衆亦如斯 到彼皆同法教位 永絕生死證無爲 善根福少理難容 七日須成淨土功 念念傾心於彼國 剎剎便即坐蓮宮 亦隨願力不思議 莊嚴淨國聖希奇 六方諸佛同時讚 意令諸士斷狐疑 人命無常如剎那 永劫沈淪無幾多 急急須專念彼佛 共汝相將出愛河 諸佛同心嘆稱迦 能於苦海度人多 一應令專念佛 生々當得見弥陀 如來說已向離宣 普化群生被有緣 衆等傾心須頂戴 弘斯淨教廣流傳 敬散花供養讚 釋神英 昔有仙人名善慧 一時買得五菴菴 持將供養定光佛 因花果身釋迦尊 諸經皆說妙仰他 散花供養福田多 但以一花散一佛 因花獲得見弥陀 今時智有經文 佛說花爲成佛因 便即散花供養佛 仍將花度有緣人 紛紛正見散花時 片片皆連空裏飛 一一爭前將手捧 人人收得極盛歸</p>
---	--